

李朝實錄 第十四冊

世祖實錄 第二  
睿宗實錄

學習院東洋文化研究所刊

李朝實錄第十四冊奥付

昭和三十三年十一月二十五日

東京都港区芝南佐久間町一ノ五三

笠井出版印刷社印刷

東京都豊島区目白町一〇五七

学習院東洋文化研究所刊行

編纂刊行責任者 末松保和

## 世祖實錄解說

〔一〕 李朝第七代の王なる世祖は、諱は瑑、字は粹之、世宗の第二子、母は青松沈氏、領議政府事沈溫の女である。太宗十七年（一四一七）九月二十九日丙子、本宮に生れ、世宗十年（一四二八）初めて晋平大君に封ぜられ、後ち咸平、また晋陽、また首陽大君と改められた。端宗三年（一四五五）閏六月十一日乙卯、端宗の禪を受けて景福宮の勤政殿に即位した。在位十四年、戊子（一四六八）九月七日癸亥、位を世子（睿宗）に傳え翌八日甲子、壽康宮（後の昌慶宮）に薨じた。春秋五十二。妃は跛平尹氏、判中樞院事尹璠の女である。

〔二〕 世祖王代十四年間の實錄の編修は、王の薨後六ヶ月、睿宗元年（一四六九）の春にはじめられたが、本格的には同年十二月から進められたようである。そして滿二年の後ち、成宗二年（一四七一）十二月に出来上つた。本文四十七卷、樂譜二卷、計四十九卷。

〔三〕 この實錄の編修開始の直後（睿宗元年四月）、閔粹・元叔康らの史草刪改事件が起つたことは、世祖の即位が非常の手段によるものであつたがため、この實錄の編修には種々問題があつたことを暗示しているが、編修首腦部には世祖の重臣、申叔舟・韓明滄以下の人々が當つたので、直接の破綻は起さなかつた。

〔四〕 附載の樂譜は、世祖九年（一四六三）十月、申叔舟・崔恒・梁誠之・成任・鄭沈らに下命、翌年正月に成つたもの、世宗朝制定の保太平・定大業の二舞の樂譜である。ただし原樂譜は、歌詞句數多く、祭典數刻の間に盡し難かつたので、意を取り、詞を製し、樂を制し、以て閔丘・宗廟に用いしめたものである。

〔五〕 この實録の最初の印刷は、成宗四年（一四七三）六月、世宗・文宗・睿宗三朝の實録とあわせ同時に行われた。このときの四朝の實録の印刷は、李朝實録としては最初の印刷であつた。

〔六〕 この實録の二度目の印刷は、宣祖末年（一六〇三〜一六〇六）に行われた。それは太祖實録から明宗實録にいたる全實録の、亂後復活版の一つとしてであつた。

〔七〕 この實録の原本は、上記の成宗四年の活字印刷本の一部たる江華本（舊全州史庫本）である。但し現在、卷六、卷十三の一部分、卷十五、卷十七の一部分、卷十八と三十三、卷四十五は缺失、補寫・補印にかかる。板匡、縦四十一種、横二十四種。每半葉十四行、行三十二字。

〔八〕 この實録の二度目の印刷本（宣祖末年の活字重印本）のうち、現存するのは太白山本・赤裳山本の二部である。いずれも樂譜は筆寫本。板匡、縦三十五・七種、横二十五・五種。每半葉十五行、行二十七字。

〔九〕 昭和五年（一九三〇）の京城帝國大學法文學部景印本は、太白山本に據り、それを約二分一に寫眞縮刷、成冊はもとのまま和装十八冊としたものである。

〔十〕 いまここに刊行する普及版李朝實録（第十三・十四冊）の世祖實録は、財團法人東洋文庫所蔵の京城大學景印本に據り、更にそれを縮寫して、原本の四頁を一頁に收めたものである。そのほかこの普及版で改めた點は、原本の表紙題箋の一つをもととして内扉をつくつたこと、新たに活字をもつて毎頁のハシラ（巻次、年月次）を設け、通し頁をつけたことである。

## 睿宗實錄解説

〔一〕 李朝第八代の王なる睿宗は、諱は暁、字は明照（初字、平甫）、世祖の第二子、世宗三十二年（一四五〇）正月朔日丁丑に生れ、初め海陽大君に封ぜられ、世祖三年（一四五七）王世子に冊封された。世祖十四年（一四六八）九月七日癸亥、壽康宮（後の昌慶宮）に受禪、在位一年、己丑（一四六九）十一月二十八日戊申、景福宮の紫微堂に薨じた。春秋二十。妃は清州韓氏、領議政韓明滄の女。繼妃は清州韓氏、右議政韓伯倫の女である。

〔二〕 睿宗王代一年二ヶ月間の實錄は、成宗元年（一四七〇）二月に史草提出の命が下り、翌二年（一四七二）十二月、世祖實錄の編修完了に引續いて編修され、翌三年（一四七二）五月に出来上つた。従つてその編修者は、世祖實錄のそれと殆ど一致する。

〔三〕 この實錄の最初の印刷は、成宗四年（一四七三）六月、世宗・文宗・世祖の三朝の實錄とあわせ同時に行われた。このときの四朝の實錄の印刷は、李朝實錄としては最初の印刷であつた。

〔四〕 この實錄の二度目の印刷は、宣祖末年（一六〇三〜一六〇六）に行われた。それは太祖實錄から明宗實錄にいたる全實錄の、亂後復活版の一つとしてであつた。

〔五〕 この實錄の原本は、上記の成宗四年の活字印刷本の一部たる江華本である。但し現在、卷一の一部分、卷二、卷四〜八は缺失、補寫にかかる。板匡、縦四十二・一櫃、横二十四・二櫃。每半葉十四行、行三十二

字。

〔六〕 この實録の二度目の印刷本（宣祖末年の活字重印本）のうち、現存するのは太白山本・赤裳山本の二部である。板匡、縦三十五・七種、横二十五・五種。每半葉十五行、行二十七字。

〔七〕 昭和五年（一九三〇）の京城帝國大學法文學部景印本は、太白山本に據り、それを約二分一に寫眞縮刷、威冊はもとのまま和裝三冊としたものである。

〔八〕 いまここに刊行する普及版李朝實録（第十四冊）の中の睿宗實録は、財團法人東洋文庫所藏の京城大學景印本に據り、更にそれを縮寫して、原本の四頁を一頁に収めたものである。そのほかこの普及版で改めた點は、原本の表紙題箋の一つをもととして内扉をつくつたこと、新たに活字をもつて毎頁のハシラ（巻次、年月次）を設け、世祖實録に連續する通し頁をつけたことである。

〔九〕 この實録で特に指示すべきことは、巻首にある原本の目録の稱元法と、本文の稱元法と相異していることである。これは、本文のが正しくて、目録のが誤つていゝと思われる。

昭和三十三年十一月

學習院東洋文化研究所

抹 松 保 和

世祖實錄(第二)目錄

卷三十二	甲申十年	正月甲寅朔	一
		二月甲申朔	九
		三月甲寅朔	三
卷三十三	甲申十年	四月癸未朔	一〇
		五月癸丑朔	一五
		六月癸未朔	三
		七月壬子朔	壹
卷三十四	甲申十年	八月壬午朔	四
		九月辛亥朔	五
		十月辛巳朔	七
		十一月庚戌朔	六
		十二月庚辰朔	六
卷三十五	乙酉十一年	正月己酉朔	充
		二月戊寅朔	三
		三月戊申朔	七

卷三十六 乙酉十一年 四月丁丑朔..... 三  
五月丁未朔..... 六  
六月丁丑朔..... 九

七月丙午朔..... 壹  
八月丙子朔..... 四  
九月乙巳朔..... 七  
十月乙亥朔..... 一〇

卷三十七 乙酉十一年 十一月乙巳朔..... 一三  
十二月甲戌朔..... 一六  
正月甲辰朔..... 一九  
二月癸酉朔..... 二二

三月壬寅朔..... 二五  
閏三月壬申朔..... 二八  
四月辛丑朔..... 三一  
五月辛未朔..... 三四

卷三十八 丙戌十二年 六月庚子朔..... 三七  
七月庚午朔..... 四〇

卷三十九 丙戌十二年 七月庚午朔..... 四三

..... 四六

..... 四九

八月庚子朔	一四
九月己巳朔	一五
卷四十一 丙戌十二年	
十月己亥朔	一六
十一月己巳朔	一七
十二月戊戌朔	一八
正月戊辰朔	一九
二月丁酉朔	二〇
三月丙寅朔	二一
卷四十二 丁亥十三年	
四月丙申朔	二二
五月乙丑朔	二三
六月甲午朔	二四
七月甲子朔	二五
卷四十三 丁亥十三年	
八月甲午朔	二六
九月癸亥朔	二七
十月癸巳朔	二八
十一月癸亥朔	二九
十二月癸巳朔	三〇
卷四十四 丁亥十三年	

卷四十五 戊子十四年 正月壬戌朔……………二七

二月壬辰朔……………二八

三月辛酉朔……………二九

卷四十六 戊子十四年 四月庚寅朔……………三〇

五月庚申朔……………三一

六月己丑朔……………三二

卷四十七 戊子十四年 七月戊午朔……………三三

八月戊子朔……………三六

九月丁巳朔……………三七

卷四十八 樂譜……………三九

卷四十九 樂譜 (下)……………四〇

# 睿宗實錄目錄

目錄	元一
卷一 戊子即位年	元一
九月丁巳朔	元一
十月丁亥朔	四三
十一月丁巳朔	四五
十二月丁亥朔	四三
卷二 戊子即位年	四三
正月丙辰朔	四三
二月丙戌朔	四〇
三月乙酉朔	四七
四月甲寅朔	四八
五月甲申朔	四九
六月癸丑朔	五八
七月壬午朔	五三
八月壬子朔	五三
卷三 已丑元年	五三
正月丙辰朔	四三
二月丙戌朔	四〇
三月乙酉朔	四七
四月甲寅朔	四八
五月甲申朔	四九
六月癸丑朔	五八
七月壬午朔	五三
八月壬子朔	五三
卷四 已丑元年	四〇
閏二月丙辰朔	四〇
三月乙酉朔	四七
四月甲寅朔	四八
五月甲申朔	四九
六月癸丑朔	五八
七月壬午朔	五三
八月壬子朔	五三
卷五 已丑元年	四八
四月甲寅朔	四八
五月甲申朔	四九
六月癸丑朔	五八
七月壬午朔	五三
八月壬子朔	五三
卷六 已丑元年	五八
六月癸丑朔	五八
七月壬午朔	五三
八月壬子朔	五三
卷七 已丑元年	五三
八月壬子朔	五三

卷八

己丑元年

九月辛巳朔..... 五八

十月辛亥朔..... 五九

十一月辛巳朔..... 六一

世祖憲法大王實錄卷第三十二  
 十年甲寅春正月甲寅朔御 勅政殿受朝實該會禮宴王  
 世子璉酒孝寧大君補臨瀛大君璵水滸大君璵水順君璵  
 城君浚銀山副正徹河城鄭尉顯祖領議政申叔舟右議政具  
 致寬河東府院君鄭麟趾等文武百官使野人會執班補叔舟  
 等以次進酒進行 賜侍衛軍士酒 命妓工人入殿奏樂又  
 命使野人皆升殿歌舞 御恩政殿觀雜戲世子與三大君兒  
 宗水滸等入侍飲酌 日本國對馬州大守宗成職遣使來獻  
 將承旨等入侍飲酌 御恩政殿觀雜戲五世子與孝寧大君補臨瀛  
 土物 乙卯 御恩政殿觀雜戲五世子與孝寧大君補臨瀛  
 人君璵水滸大君璵水順等入侍奉樂飲酌 上聞  
 判中樞院事趙秉季 命罷之停朝市二日惠性醉辱寬和樂  
 少不事細然教子不謹率皆無賴皆好聲色頗有帷淫之醜  
 惡不能制無嚴父之道人以此少之謚恭安執禮御宿恭寬裕  
 和平安 都體察使韓明滄遣從事官李文煥啟通事問尚德  
 隨李豆里到建州還告云初到豆里家其妻及母手皆自山中  
 米言自迷感之使役犯上國吾輩不能安業乃具酒餞饋之俄  
 而李滿住管下張孝陽可求語豆里曰火刺混元伏恭離加大  
 泥邑之茂路巨等欲寬平安道求屯于侯羅騎兵三十四人自  
 稱浪李兒軍種族滿住查君等欲止之言未既豆里止之謂我  
 曰麟加大等退兵則使人馳報不遲則吾當觀告 戶曹啟凡  
 代納貢物者率皆先收其價過限不納請沒入其價其未充納  
 者家產田民准計以徵 從之 禮曹啟劾新定醫員取才時野  
 講醫書正從三品講素問正從四品葦子和方正從五品小兒  
 藥證直訣瘡疹藥正從六品傷寒類書外科精要正從七品婦  
 人大全產書正從八品五指方正從九品以下至生徒銅人經  
 唯大全本草脈經則皆講之 丙辰衡康寧殿受王世子生  
 辰宴 禮曹啟劾 孝寧大君補臨瀛大君璵水滸大君  
 璵城浚水順君璵瑞原卿案水川卿定實城卿金銀川君權  
 領議政申叔舟右議政具致寬河東府院事沈會判中樞院事

沈洪尹士盼知中樞院事尹士所等入侍 三世牛德酒 王升  
 見野人阿乙豆子阿羅哈合進酒賜彩段壹切仍使檢校賓廳  
 阿羅哈年甫十二自言父遺我曰 殿下待汝等如我亦入朝  
 有問其他者皆不對 咸吉道都節制使張素唐子承政院  
 以政口臣開元狄哈都萬戶八里言欲老在攻高補幹朵里以  
 復私離臣已諭高嶺各鎮曰彼若起兵聲言復幹朵里之歸費  
 欲與我戰則依前降諭書語之曰我國待汝等極厚力何忘國  
 厚息又欲作賊乎如此而猶欲戰不已則審觀形勢臨機應變  
 回諭曰前者元狄哈攻幹朵里時幹朵里請入高嶺城見元狄  
 哈火其家不傳其情從水窟出射之元狄哈因我為謀幹  
 朵里今幹朵里彼攻而我復射之則必以謀害於我矣幹朵里  
 自有土城不灼也然幹朵里附我既久若其勢窮亦不可不  
 納卿須斟酌善處不操繫於元狄哈亦不失幹朵里之心 丁巳  
 御忠政殿觀雜戲寶珍答戶川卿定實城君家銀川君璵  
 銀山副正徹河城尉鄭麟趾祖青城尉沈安表知中樞院事尹士  
 所都承者盧思慎等入侍又 御忠順堂觀放火炮先設火山  
 棚於後苑又於白岳峯頭設真上火是夕一時俱放火燄燭天  
 又於苑中交放火箭狀如流星等如震雷 戶曹陳平安道觀  
 茶使啟本米豆切於軍需請以皮替服應使兵曹判書尹士雲  
 豆一半改皮設 從之 己未巡幸皮應使兵曹判書尹士雲  
 議巡幸事目以啓 御書紙尾云路邊山谷積柴聚炬修治道  
 路等事皆禁之如有違令理論者則觀察使以下重論之 戶曹  
 據黃海道觀察使啟本啟請備燭益本為救荒請給一千石以  
 賑貧之 從之 日本國對馬州太守宗成職遣使來獻土物  
 刑曹據咸吉道都觀察使啟本啟本道野人難處之地當示禮  
 儀吉州人李繼蕃所制而止且其子繫獄劫囚帶去其不畏刑惡  
 惡惡莫甚請破家戮賊以戒後來 命收閑孫告身 庚申  
 御康寧殿右議政具致寬河東府院事沈會判中樞院事  
 藩及承旨等致酌 御書傳于史曹兵曹禮曹云醫術世問



織扇侍衛如常儀儀使導 殿下至東門外近侍跪進主 殿  
 下執圭徽扇伏侍侍衛門外尚瑞官奉寶陳於小次之側儀儀使  
 導 殿下入自正門 侍衛門外尚瑞官奉寶陳於小次之側儀儀使  
 執禮曰樂作軒架作保大平之樂保大平之舞作樂止執禮曰  
 四拜禮儀使進俯伏跪啟請鞠躬四拜與平身 殿下鞠躬四  
 拜與平身在位者同 執禮曰禮儀使啟請行事禮  
 儀使進俯伏跪啟者同 謹具請行事禮復位近侍詣位位禮  
 訖訖還侍位調者引進常璽官真常璽官詣位位禮訖  
 訖升自階階詣 桓祖室專專所北向立執禮曰禮儀使導 殿  
 下行真常璽禮儀使導 殿下詣位位北向立禮儀使俯伏  
 跪請詣主 殿下揖主 殿下近侍跪取匣興添水又近  
 侍跪取盃承水 殿下盃手近侍跪取中於篚以進 殿下跪  
 手近侍侍受巾真常璽禮儀使啟請執主 殿下執主禮儀使  
 導 殿下升自階階 桓祖室專專所西向立登歌作保  
 太平之樂保大平之舞作執專者舉進常璽官酌爵進近  
 侍以瓊受爵也禮儀使導 殿下詣神位前北向立禮儀使俯  
 伏跪啟詣主 殿下跪揖主在位者皆跪 殿下近侍一人捧  
 香合跪進一人捧香灑跪進禮儀使啟請三上香 殿下三上香  
 近侍真爐于案近侍以瓊投進常璽官進常璽官奉瓊跪  
 進神儀使啟請執瓊裸地 殿下執瓊裸地 殿下執瓊真常璽  
 爵官真常璽爵官受以投大祝置於專所近侍以常璽投進常  
 璽爵官進常璽爵官捧常璽跪進禮儀使啟請執常璽 殿下  
 執常璽爵官以帶投真常璽爵官奠于案 殿下執常璽爵官  
 伏與平身在位者同 禮儀使導 殿下執主俯  
 室次詣 恭靖王室次詣 大宗室次詣 世宗室次詣 文宗室上  
 香標瓊真常璽並如上儀訖禁止進常璽爵官真常璽爵官皆降  
 復位禮儀使導 殿下出戶降自階復位當樂止時請祝史  
 各取毛血盤肝腎執於前楹間俛入奠於神位前 殿下  
 之禮請祝史俱取肝出戶燔於楹炭還專所 殿下既升釋贊

五編

五編

引引典祀官出神進饌者詣廚以七升半子饋實于一鼎次升  
 平實于一鼎次升致實于一鼎 殿下各一鼎皆設高署祝史對舉  
 入設於祭殿內謁者引薦祖官出詣饌所捧進官隨之使 殿  
 下初訖復位執禮曰進饌祝史抽局委于鼎右除蓋加之舉于  
 鼎典祀官以七升牛實于牲匣次升羊羔各實于牲匣 殿下  
 一次引薦祖官捧 桓祖室祖捧祖官各捧牲匣典祀官引饌  
 入自正門 殿下初入門軒架作豐安之樂請祝史具進撤毛血  
 盤自階階致實於以出饌置奉階階大祝迎引於薦上為祖  
 詣 桓祖室神位前北向跪奠先薦牛次薦羊次薦羔 殿下  
 奠訖致牲匣詣 太祖室次詣 恭靖王室次詣 太宗室  
 次詣世宗室次詣 文宗室捧奠並如上儀訖禁止謁者引薦  
 祖官以下降自階復位諸大祝各取蕭黍稷搗而專於脂燔  
 於楹炭還專所謁者引進常璽爵官真常璽爵官升詣 桓祖  
 室專所北向立執禮曰禮儀使導 殿下行初獻禮儀使導  
 殿下升自階階詣 桓祖室專專所西向立登歌作保太平之  
 樂保太平之舞作執專者舉進常璽爵官酌爵進近侍二人  
 以爵受酒禮儀使導 殿下詣神位前北向立禮儀使俯伏跪  
 啟請跪詣主 殿下跪揖主在位者皆跪 殿下近侍以爵投進  
 常璽爵官進常璽爵官捧爵跪進禮儀使啟請執爵獻爵 殿  
 下執爵獻爵以爵投真常璽爵官奠于神位前近侍以爵投  
 進常璽爵官進常璽爵官捧爵跪進禮儀使啟請執爵獻爵 殿  
 下執爵獻爵以爵投真常璽爵官奠于 王后神位前禮儀  
 使啟請執主俯伏與少退北向跪 殿下執主俯伏與少退北  
 向跪請執主大祝進神位之右東向跪請祝文祝史俯伏禮儀使  
 請俯伏與平身 殿下俯伏與平身在位者俯伏與平身禮儀  
 使導 殿下出戶樂止詣各室獻酌並如上儀樂止進常璽爵  
 官真常璽爵官皆降復位禮儀使導 殿下出戶降自階階  
 位禮儀使俯伏跪啟請入小次 殿下將至小次禮儀使俯  
 伏跪啟詣主 殿下揖主近侍跪受圭 殿下入小次保太  
 平之舞退空大案之舞進初 殿下將復位執禮曰行亞獻禮

六編

六編

副知通禮引亞獻官各執王世子則謂者引詣盥洗位北向立  
 贊掃盥手執手執贊執引亞獻官升自階階詣桓  
 柱室尊所西向立軒架作定大業之樂定大業之舞作執事者  
 舉盥酌盃齊執事者二人以爵受酒引亞獻官詣神位前北向  
 立贊酌盃齊執事者以爵授亞獻官執爵獻爵以爵授執事者  
 奠于神位前執事者以副爵授亞獻官執爵獻爵以爵  
 授執事者奠于王后神位前副知通禮贊執事者伏與平身  
 引出以次酌獻亞如上儀訖禁止引進使引降復位亞獻官獻  
 將畢執禮曰行終獻禮謂者引終獻官行禮如亞獻儀初終獻  
 官既升執引引七祀獻官詣盥洗位掃盥手執手執執事者  
 尊所執事者舉盥酌酒執事者以爵受酒獻官詣神位前西向跪  
 掃盥執事者授爵獻官執爵獻爵真訖執事者伏與平身退西向  
 跪祝訖執事者之左北向跪讀祝文訖獻官俯伏與平身贊引引  
 獻官復位初七祀獻官將盥洗位贊引引執事者舉盥酌酒執事  
 者盥洗位掃盥手執手執執事者舉盥酌酒執事  
 者以爵受酒獻官詣神位前東向立掃盥執事者授爵獻官執  
 爵真訖以次真訖執事者贊引引獻官復位初終獻官既復位謂  
 者引進幣瑣爵官薦俎官升自階階詣飲福位北向立大祝詣  
 桓柱室尊所以爵酌上尊福酒又大祝持俎進獻神位前那肉  
 執禮曰禮儀使導 殿下詣飲福位禮儀使進小次前俯伏跪  
 啓請詣飲福位 殿下出次近侍跪進圭禮儀使導 殿下詣  
 飲福位禮儀使進小次前俯伏跪啓請詣飲福位 殿下出次  
 近侍跪進圭禮儀使俯伏跪啓請執事 殿下執圭禮儀使導  
 致上詣飲福位西向立大祝以爵授進幣瑣爵官進幣瑣爵官  
 捧爵北向跪進禮儀使俯伏跪請跪進 殿下跪捧圭在位  
 者皆跪 殿下受爵飲訖進幣瑣爵官受虛爵以授大祝大祝  
 受復於拈大祝以俎授薦俎官捧俎北向跪進禮儀使致請受  
 俎 殿下受俎以授近侍捧俎降自階出門授司饗進幣瑣  
 爵官薦俎官皆降復位禮儀使致請執事俯伏與平身 殿下  
 執圭俯伏與平身在位者皆俯伏與平身禮儀使導 殿下降

復位執禮曰四拜禮儀使俯伏跪啓請鞠躬四拜與平身 殿  
 下鞠躬四拜與平身在位者同贊者執禮曰撤邊豆登歌作雍  
 安之樂諸大祝入室撤邊豆撤邊豆撤邊豆撤邊豆撤邊豆撤邊豆  
 邱各撤邊豆撤訖樂止執禮曰行送神禮軒架作與安之樂執  
 禮曰四拜禮儀使俯伏跪啓請鞠躬四拜與平身 殿下鞠躬  
 四拜與平身在位者同贊者樂止禮儀使俯伏跪啓禮畢導  
 殿下還齋官禮儀使俯伏跪請舞圭 殿下舞圭近侍跪受圭  
 獻扇侍衛如常儀 殿下入齋官釋見銀執禮曰望瘞引進使  
 引亞獻官詣望瘞位北向立執禮贊者前望瘞位西向立讚  
 大祝取黍稷飯用白茅束之以匪取祝版及幣各自西階置  
 於坎執禮曰可瘞置土半坎宗廟令監視副知通禮引亞獻官  
 贊引引諸享官出執禮贊者選本位來禮節分引陪祭宗親  
 及百官以次出贊引引監察及諸執事俱復懸北拜位執禮曰  
 四拜監察及諸執事皆鞠躬四拜與平身贊引以次引出雅樂  
 令帥工人二舞出宗廟令大祝官闈令納紳主如常儀執禮帥  
 謂者贊者贊引就懸北拜位四拜而出七祀獻官詣西門外七  
 祀瘞坎之南北向立執事者置祝版於瘞坎瘞記退祀官宗  
 廟令各率其屬撤饌饌官闈令闈戶以降刀退 車馬還官是  
 祭也大司成金璋執禮 上饗訖還齋殿 召禮儀使禮曹判  
 書朴元亨及都旨承盧思慎 賜酒謂曰今奉新樂得展大禮  
 一無差失甚喜成 世宗遺意元亨等曰若若 上之善述  
 世宗之志終隆地矣 上又曰執禮者誰元亨對曰金璋也又  
 曰予以患病艱於動作皆飲福必爭爵今不能然可數已明日  
 園丘禮數定繁悉至勞倦當改儀注務從簡約始終變動動宜  
 先就園丘齋歎休息以待令執禮者就崔恒更節儀注以啟理  
 與恒約真幣三獻節次為真幣後連奠三獻之儀以啟 從之  
 ○夜二鼓 御速遊冠以沈安義為左廂大將韓繼美右廂大  
 將前後部鼓吹陳而不作至園丘齋歎愜殿 戊辰祀于園丘  
 用所制樂其儀曰祀日行事前五刻典祀官帥其屬服其罪入  
 寶饌具畢諸位大祝設神位版於庭贊引引監察升自階階按

